

## 安部公房における 1950 年代のルポルタージュ研究 ——抑圧された「加害者意識」をめぐって——

解 放

### 论安部公房 1950 年代的报告文学 ——以被压抑的“加害人意识”为例——

解 放

#### 论文要旨

安部公房在加入日本共产党初期，对记录社会现状的报告文学表现出浓厚兴趣，其报告文学强烈抨击了 50 年代日本依附美国的政治策略。在其众多报告文学作品中，以纪录 BC 级战犯的报告文学《被背叛的战犯》最为著名。安部在此作品中为了批判战后日本依旧被美国统治的现状，强调了 BC 级战犯身为被害人的属性，却忽略了战犯本身的加害人属性。本论文透过研究《被背叛的战犯》，指出其报告文学的一个特征，即在排除实际被压迫者的同时，创造出想象的被压迫者。透过作品的这一特征，分析安部内在的加害人意识与被害人意识构成的压抑关系，并试论此压抑关系与日本战后责任问题的联系。

#### 目次

#### はじめに

#### 1、記録文学とルポルタージュ

#### 2、『裏切られた戦争犯罪人』から『壁あつき部屋』へ

#### 3、抑圧された「加害者意識」

#### おわりに



## はじめに

安部公房はシュールレアリスム的な作品によって、前衛作家としてのイメージが固定されている。しかし、アヴァンギャルド文学に熱中していた安部は、日本共産党に入党した 1950 年代初頭では日本の社会の現象をありのままに記録するルポルタージュに関心を示し、社会現実を文章で記録することによって国家体制への対抗運動に没頭するようになっていたのである。この時期の彼の作品は、日本社会で話題になっていた事件を記録しているため、これまでの彼のイメージである前衛的作品とは異なったものになっている。しかし、ここで注目すべきは社会現象を記録する際、記録者としての安部と記録される者との関係が必ずしも対等ではない点である。

日本共産党に入党してから、安部は数多くのルポルタージュを書いた。とりわけ、53 年の『裏切られた戦争犯罪人』は特筆すべき作品である。1953 年 2 月、安部は戦犯を拘置している巣鴨拘置所を訪問し、戦犯のインタビューをもとにルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』を同年 4 月に刊行した。ただし、安部はこのルポルタージュにおいて、BC 級戦犯こそが犠牲者であると強調して、BC 級戦犯における加害者の側面を意図的に否定しながら記録している。安部のルポルタージュにこうした特徴が見られるのは注目に値する。本論文では、まず事実の忠実な取材から文学的要素の付加へというルポルタージュの変遷史を考察した上、安部公房のルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』を主な研究対象に、安部に内在する「加害者意識」と「被害者意識」との抑圧関係を検討する。こうした検討を通して、安部公房のルポルタージュの特質を明らかにしたい。

## 1、ルポルタージュと記録文学

ルポルタージュという文芸用語の概念を明確に述べることは難しい。なぜなら、この用語は、ノンフィクションや記録文学と言った用語と区分されずに使われ

ることが多いからだ。辞書によれば、ルポルタージュとは、現地での報告など社会現象の実態を調査した「文章」のことを指し、広義的に見れば、ルポルタージュは社会現象を忠実に反映する文章として、伝記、日記、歴史物語などと共通する性格を持つことで、ノンフィクションの範疇に属すると定義できる<sup>1</sup>。しかし、ルポルタージュは、記録者の観点が入り混じっていないことで、伝記、日記、歴史物語といった書き手の主観的思想が何らかの形で投影されているものと区別すべきであろう<sup>2</sup>。

ルポルタージュは、ノンフィクションと混用されつつあるが、両者の相違は上記のように明白に異なる一面も見られる。その一方、ルポルタージュと記録文学との区別は、非常に曖昧である。その区別を強いて言うなら、ルポルタージュが外来語として輸入されたことに対して、記録文学は従来の日本文学における文芸用語として使われていることが挙げられるだろう<sup>3</sup>。松浦総三の「日本ルポルタージュ史論」によれば、ルポルタージュという言葉が日本のジャーナリズムで使われるようになったのは、1937 年、アンドレ・ジイドの『ソヴェト旅行記』が日本の左翼に反響を起こしてからであり、報告や探訪といった書き手がその探訪にもとづいて現場を報道する文章の他に、旅行記、従軍記、探訪記など、事実をありのままに記録するものは、1937 年の『ソヴェト旅行記』以降、その呼称はすべて「ルポルタージュ」という言葉に統一されたのである<sup>4</sup>。ただし、日本において、事実をありのままに表現した文学作品は、ジイドの作品以前に既に創作されていた点は注目に値する。こうした作品が初めて集中的に書かれるようになったのは明治時代であり、その特徴によって「下層記録文学」もしくは「底辺文学」と呼ばれていた。

明治二十年代から三十年代前半[……]底辺社会にのめりこんでいくような、破天荒なルポルタージュ的営為。それは文学のしかたなどであるわけがなかったのだ。ルポルタージュ作家の側にしてみれば、既成文学が社会の現実とじかに涉りあう

ようなものではなかったから、既成の文学を意識的に拒絶しなければならぬ方向へまわらざるをえなかった[……。]。明治下層社会記録——ここに、ルポルタージュと底辺文学の同時誕生がある<sup>6</sup>。

引用部に見られるように、明治時代における「下層記録文学」/「底辺文学」は、既成文学が社会の現実を描き出せないことへの不満から生まれ、下層社会の現実を記録することで主流文学から排除され、既成文学と対抗してきた文学である<sup>6</sup>。被抑圧的存在である「下層記録文学」は、明治から昭和にわたる数々の戦争を実際に記録する中、その反権力性が増していったのである。しかし同時に、抑圧に反抗する意識のもとで書かれてきた記録文学は、その反権力性が戦時下の各政策と矛盾していることによって消されていく状況に追い込まれたのである<sup>7</sup>。

こうした中、1937年にジイドのルポルタージュ『ソヴェト旅行記』の翻訳が日本文壇に紹介されたことは重大な意義を持つ。ジイドはフランスの左翼作家であり、ソビエトを批判した『ソヴェト旅行記』の前に、フランスの植民地政策を批判したルポルタージュ『コンゴ紀行』を刊行した。注目に値することは、ジイドは、ルポルタージュにおける事実を忠実に記録しなくてはならないという要求を把握しながらも、ルポルタージュでは個人的感情も加えている点である。彼は『ソヴェト旅行記』の序文で次のように述べている。

私は、何らの表裏も手加減もなく眞情を傾けてソヴェトを語ることは、恐らくソヴェトにたいして、より多くの貢献をいたすことになると思じてゐる。ソヴェトにたいして、またソヴェトによつてなしとげられた偉業にたいして私の讃嘆の情があればこそ、私の批評が生れてくるのである。いや、われわれがまだソヴェトに期待をしてゐるものがあればこそ、わけでもソヴェトがわれわれに希望することを許したものがあればこそ、私の批評の精神がつよまるのである<sup>8</sup>。

ジイドは「何らの表裏も手加減もなく眞情を傾けてソヴェトを語る」と述べ、ルポルタージュにおける事実を忠実に記録しなくてはならないという要求に応えている。しかし、「私の讃嘆の情があればこそ、私の批評が生れてくるのである」という言説にも見られるように、ジイドは明らかにその文章において個人的感情への傾斜を示している。つまり、ジイドの作品は厳密にはルポルタージュと言えず、強いて言うならば、「ルポルタージュ文学」もしくは「文学的ルポルタージュ」である<sup>9</sup>。中野重治は、『ソヴェト旅行記』の翻訳が出版されて間もなく、ルポルタージュと記録文学との関係について、「「ルポルタージュ」という言葉は文学的性質で「ルポルタージュ文学」につながり、「ルポルタージュ文学」という言葉は、言葉の曖昧さで、通信文学、報告文学、記録文学につながっている。」<sup>10</sup>と述べている。中野は、書き手が「探訪」にもとづいて現場を報道するというルポルタージュの本来の概念から相対化した物語性の備えた作品と、従来の「記録文学」とを融合させた。こうした帰結は、作者の個人的意見を織り交ぜたジイドの『ソヴェト旅行記』のような「ルポルタージュ文学」もしくは「文学的ルポルタージュ」が日本に紹介されたからこそ可能となったのである。

既に述べたが、今までの記録文学は、政治的抑圧に対抗して事実を忠実に記録することによって発禁処分を受けてきた。行き詰った記録文学を、新しいルポルタージュ——この場合、「探訪」というジャーナリズムの概念ではなく、「ルポルタージュ文学」という文学的意味合いを示唆する——と融合することで新天地を開拓したのである。例えば、1938年に刊行された『生きてゐる兵隊』が新聞紙法と陸軍刑法に違反する容疑で起訴された石川達三は、1939年の『武漢作戦』において、事実の記録はあるものの、物語性を豊かにすることによって、検閲に抵触することを避けたのだ<sup>11</sup>。記録文学は、作者の主観的感情や物語性といったフィクション的な一面を織り込むことによって、新しいルポルタージュに統一されていったのである。そして、統一された新しいルポルタージュは、従来の記

録文学における反権力性を受け継ぎ、体制に対抗するという性質を備えていることは評価されるべきであろう。

## 2、『裏切られた戦争犯罪人』から 『壁あつき部屋』へ

1930 年代のルポルタージュは、明治以降の記録文学における反権力性を受け継いだために戦争の記録を通して国策に反することによって、発禁処分を受けていた。こうした政治的抑圧は、1952 年のサンフランシスコ平和条約発効をもって終焉を迎えた<sup>12</sup>。言論統制が解禁される中、ルポルタージュも新しい転換期を迎えることになったのである。鳥羽耕史は『1950 年代——「記録」の時代』の中で、50 年代のルポルタージュは 30 年代のものより多彩になっており、主に 5 種類に分類できることを指摘している。

- 1 生活実感や社会的分析を重視した子供の生活綴方と大人の生活記録。
- 2 様々な「闘争」の現場を探訪し、あるいは現地に住みながら報告したルポルタージュ。
- 3 ドキュメンタリーと、一九五三年からはじまるテレビ放送における新しいドキュメンタリー
- 4 美術におけるルポルタージュ絵画やリアリズム写真。
- 5 国民的歴史運動とも連動し、地域の歴史を掘り起こして作られた紙芝居や幻灯<sup>13</sup>。

鳥羽の考察に見られるように、1950 年代のルポルタージュは多様な領域に見ることができる。ただし、中核となっているのは、2 番の「様々な「闘争」の現場を探訪し、あるいは現地に住みながら報告したルポルタージュ」である。つまり、1950 年代にはルポルタージュの概念は拡散する一方で、記録文学から継続されている「対抗性」が、「探訪」に替わって最も求められる要素となったことが言えるだろう。鳥羽が同

書の中で「こうした報道（ブルジョア新聞）への不信感とイデオロギー対立は、新しい「記録」が求められた背景の一つである」<sup>14</sup>と述べているように、この時期のルポルタージュは階級闘争の産物の一つと見なされている。こうした中、日本共産党に入党した安部も新しいルポルタージュに興味を示すようになった党員作家の一人であった<sup>15</sup>。

サンフランシスコ平和条約発効後間もなく、安部は 52 年 8 月に、雑誌『理論』第 18 号で「新しいリアリズムのために——ルポルタージュの意義」という文章の中で、正式にルポルタージュに言及している。

現実の変革のために、そして革命が大衆的なものになりつつある今日、新しいリアリズムとして問題にされたルポルタージュは、やはり新しいルポルタージュ概念であり、常識的なニュース記事でないことは当然である。記録と報告、それを意識と物質の社会的緊張関係においてとらえなおすこと、それが文学を今日の課題に込めようものとして発展させる唯一の途ではないだろうか。[…]  
一度内部を通過すること、個人的体験を通じて現れた非合理の通過によってきたえられた唯物論者の目、動く目、流動し変化する目によって変化する現実をそのままとらえる技術を身につけなければならないのだ<sup>16</sup>。

引用部に示されるように、安部は、「常識的なニュース記事」という従来のルポルタージュの概念を否定的に捉え、「新しいルポルタージュ概念」を「意識と物質の社会的緊張関係」の中で再認識しようとしている。安部にとってのルポルタージュは、「個人的体験」といった作者の内面を通して「変化する現実」を描く、即ち「新しいリアリズム」に繋がるものである。安部にとっての「記録」とは、事実として存在する「現実」と、その「現実」を作者が如何に考えるかの「意識」と結合したものである。従って、安部のルポルタージュには、必ずある種の「現実」が投影され、更に、その「現実」に対する彼の「意識」が織り込まれている。



ルポルタージュの概念について安部が論じたエッセイの中で、最も有名なのが1955年に出版された『ルポルタージュとは何か？日本の証言』である。その一節を以下に引用する。

常識的、啓蒙的なルポルタージュ概念が普通であり、それらが解剖刀でないことは言うまでもないことです。誤解をさけるためには、新しいルポルタージュという表現が必要なのにも思われます。ルポルタージュが高い文学上の意味を持ちうるためには、当然解剖刀的役割を果しうるものでなければなりません。[…]ルポルタージュが解剖刀であるということは、その分析的要素の強調でもあります。文学、あるいは認識というものは一般に分析と総合の統一であります。ルポルタージュはとくにその分析的傾向で特徴づけられます<sup>17</sup>。(下線は筆者による、以下同じ)

安部は新しいルポルタージュと従来のルポルタージュとの区別とは、「分析的要素」にあると述べ、その「分析的要素」を実現した文学的ルポルタージュを彼は「解剖刀」と比喩的に語っている。ここで語られている「解剖刀」とは、分析の力を指し示すと同時に、恐らく既存のルポルタージュが「常識的、啓蒙的」といった言葉に象徴されるように、非対抗的であるために、1950年代の階級闘争には適切しないという安部の考えも示唆されている。

鳥羽耕史が『ルポルタージュ 日本の証言』の「解説」において、安部が追求しようとしている「解剖刀」というルポルタージュについて、「「事実」という言葉の曖昧さに疑問を呈し、経験主義的でない事実発見の方法論の重要性を述べたもの。[…]芸術と斗争のバランスをとりつつ、真実を正確に描くことを勧める」<sup>18</sup>と説明しているように、安部が「解剖刀」に比喩されている新しいルポルタージュを通して達成しようとした目的とは「芸術と斗争のバランス」の均衡であって、換言すれば安部が描こうとしているルポルタージュとは文学と政治を同じ水準で表現しなければならないも

のである。そして、「高い文学上の意味」を持つルポルタージュには、「解剖刀」の「刀」という言葉が象徴する政治的対抗性の側面を持たなければならないのである。安部によればこうしたルポルタージュはただ事実を記録するのではなく、その対抗性によって抑圧階級と対抗することを常に求められているのだ。

1950年初頭から安部はルポルタージュを書くようになり、最初のルポルタージュ『夜蔭の騷擾——五・三〇事件をめぐる』(52年7月)は、52年5月1日に発生した血のメーデー事件を報告したものであった。続いてBC級戦犯の探訪記『裏切られた戦争犯罪人』(53年4月)を出版し、それから松川事件を下敷きにした『不良少年』(54年11月)を刊行している。しかし、上記の作品群は、社会現実を描いている点ではルポルタージュと言えるが、作者・安部の感情が入り混じっているため、厳密に見れば、「ルポルタージュ文学」と言った方が妥当だと思われる。

前文で論じたが、安部のルポルタージュにはある種の「現実」が投影され、その「現実」に対して安部は自分の「意識」を意図的に投影している。1950年代において安部の関心を最も惹く社会現実の一つが、サンフランシスコ平和条約発効後における日米関係であると言えるだろう。占領後の日米関係を語る際、避けて通れない問題が、「戦争犯罪者」もしくは「戦争犯罪人」問題であり、安部の『裏切られた戦争犯罪人』は、正にこの戦犯問題を記録した作品である。

安部は、1953年2月に巣鴨拘置所を訪問し、拘置所に拘置されているBC級戦犯と会話し、その会話内容をもとにルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』を同年4月に刊行した。巣鴨拘置所に拘置されている戦犯は、A級戦犯とBC級戦犯とに分けられる。A級戦犯とは、侵略戦争もしくは国際条約協定誓約に違反する戦争を計画し実行した罪に問われた者である。BC級戦犯とは、一般民衆に対して殺害、もしくは非人道的行為をした罪に問われた者である。A級戦犯は「平和に対する罪」を犯した人間と言われ、これに対してBC級戦犯はよく「通例の戦争犯罪」を犯した犯罪者と言われている。安部の『裏切られた戦争犯罪人』

にある次の記述は注目に値する。

昨年四月、サンフランシスコ条約の発効によってスガモ管理の一切の権限が、日本政府にうつり、日本のカンゴク法によって管理されることになった。しかも戦犯釈放は条約十一条によって日本の自主性がみとめられない。講和条約に釈放の願い一切をかけていた受刑者たちは、深刻な失望におそわれた。不満は感情的なものからかなり意識的なものにかわった。釈放要求は哀訴嘆願から裁判の不正をつく方向に変わった。[…]彼らは一様に自分たちこそ戦争によるギセイ者であると自覚した<sup>19</sup>。

引用部に示される通り、安部は、条約発効で占領が終了したにも関わらず、「条約十一条」<sup>20</sup>の規定によって、戦犯の釈放に関して日本には決定権がないことから、条約発効後においても日本が完全に独立していないことをルポルタージュで示唆している。ここで注意すべきところは、安部は BC 級戦犯を「ギセイ者」と記述している点である。BC 級戦犯とは「通例の戦争犯罪」者であるため、明確な「加害者」であることは疑う余地がない。つまり、『裏切られた戦争犯罪人』は、記録の精神に背き、作者の思いが現実の記録を超えてしまい、事実の歪曲にまで至ったルポルタージュと言っても過言ではない。本作が記録文学として失敗している側面を鳥羽耕史は次のように指摘している。

しかし、このルポルタージュは、どこまでが彼の体験によるもので、どこまでが資料によるもので、どこからが彼の推定によるものなのかがはなはだ曖昧である。主張は明確なのだが、そこに至る筋道が不明瞭なのだ。最終的にも[…]主観的なまとめに終わっている。安部は戦犯釈放運動と平和運動を結びつけることに性急なあまり、ルポルタージュとしては必須の論証を怠ってしまった。その点で「裏切られた戦争犯罪人」はルポルタージュとして失敗作に終わったといえるだろう<sup>21</sup>。

鳥羽が述べているように、この作品は「どこまでが彼の体験によるもので、どこまでが資料によるもので、どこからが彼の推定によるものなのかがはなはだ曖昧で」あり、「必須の論証を怠ってしまった」ために、ルポルタージュとして失敗している。安部が『裏切られた戦争犯罪人』において、BC 級戦犯を「ギセイ者」とする根拠は恐らく次の引用箇所にある。

外地における戦犯者たちのとりあつかいはまったくひどいものだった。多くのものが飢えにたおれ、一方的な裁判で次々と処刑された。彼らは自分たちが、問われている罪状よりもひどく、とりあつかわれていると感じた。[…]スガモも結局、最初はその延長であった。人々は次第に戦犯裁判の非合理性を意識しはじめた。その裁判は検事の強迫であったり、見知らぬ証人の証言であったり、自分に命令を下した上官が証人であったり（この場合その上官は多く無罪だった）<sup>22</sup>

BC 級戦犯は「ギセイ者」であるという安部の考えは、BC 級戦犯は自分たちの罪よりも重い刑罰を受け、更にその裁判自体が不公平であることによるのが分かる。『裏切られた戦争犯罪人』は非常に短いルポルタージュであるため、安部が BC 級戦犯を「ギセイ者」として描く理由の深層を知るには、『裏切られた戦争犯罪人』から発展させた『壁あつき部屋』という映画を対象に考察する必要がある。『壁あつき部屋』は、安部がルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』をもとに脚本を書き、小林正樹が監督をして、53 年に作られたドキュメンタリー風の映画である。映画の梗概は以下の通りである。

戦時中、上官浜田の命令でフィリピンの土民を射殺した山下は、戦犯として巣鴨拘置所に拘置されている。浜田の証言によって戦犯として裁判を受けた山下は、浜田を殺そうとして脱獄するが失敗する。後に山下のところに母の死を告げる電報が届き、山下は一時拘置所を出ることが認められる。その出獄中に山下は浜田を殺そうとしたが、自分の罪の意識に目覚め、最終的

に復讐を放棄して、規定の期限までに拘置所に戻る。

『裏切られた戦争犯罪人』において、BC級戦犯を「ギセイ者」と語る安部の理由の一つが、「彼らは自分たちが、問われている罪状よりもひどく、とりあつかわれていると感じた。[…]その裁判は検事の強迫であったり、見知らぬ証人の証言であったり、自分に命令を下した上官が証人であったり（この場合その上官は多く無罪だった）」したことである。この記述は脚本『壁あつき部屋』において、主人公「山下」の身にあったこととして、詳細に描かれている。例えば、次の場面が典型である。

浜田「……殺して行こう」[…]

浜田と山下の視線が合う。山下、目をふせる。[…]

川にとび込む土民に銃弾があたる。大きく見開いた土民の眼が、物問いたげに山下を瞞める。[…]

MPの蔭に小さくなっている証人台の浜田を、ふと山田の視線が捉える。縋りつくような表情。ふるえる額の筋肉。立上がる浜田、蒼ざめてこわばっている。検事が浜田にいたはりの微笑を向ける。浜田の宣誓。

浜田「全部、起訴状の通りであります。その土民は我々に対して好意的であり……我々は殺害の必要を認めませんでした、被告の主張は全く自分のあずかり知らぬところであります。」

山下「バカ！キサマ、それでも上官か！キサマ！……」立上がろうとする山下を検事が押し倒す。

山下（悲鳴に近い声で）「キサマ、嘘つき、俺はこれで死ぬんだぞ、人殺し！」[…]

裁判長（判決を言い渡す）「元日本陸軍上等兵山下清、重労働終身刑」<sup>23</sup>

山下という下級兵士は、上官の浜田に命令され原住民を殺したが、起訴されたのは山下一人であり、命令を下した浜田は無罪になっただけでなく、山下を断罪する証人として裁判に出席している。山下が上官の命令を実行しただけで終身刑を受けるのに対して、命

令を下した上官の浜田は全く罪を問われていない。脚本に描かれているこのエピソードは、『裏切られた戦争犯罪人』に描かれている「自分に命令を下した上官が証人であったり（この場合その上官は多く無罪だった）」の記述を忠実に再現している。命令を下した浜田が無罪であるばかりではなく、山下を断罪する証人として裁判に出席することを考えれば、ここでの山下は加害者というよりも被害者と言ったほうが妥当であるため、確かに安部公房がルポルタージュで語っている「ギセイ者」だと言える。

問題は『裏切られた戦争犯罪人』に書かれている「彼らは自分たちが、問われている罪状よりもひどく、とりあつかわれていると感じた」という安部の記述である。山下は、自分は上官の命令に従っただけで終身刑を受けるのは、罪状よりも重い刑罰を受けていると主張しているが、果たして、山下は「問われている罪状よりもひどく、とりあつかわれている」のだろうか。例えば、「土民」という事実上最も抑圧されている人間の視線から見れば、人を直接殺した山下も、命令を下した浜田も同じ犯罪者であり、むしろ土民の恨みは人を直接殺した山下に対してより深いのではないだろうか。つまり、「土民」側から裁判を見れば、山下は決して問われている罪状より重い刑罰を受けていないのである。

山下は確かに被害者であることは否定できないが、それは山下と浜田の二人に限定された範囲内でしか言えない立場であり、こうした結論にたどり着いたのは、安部公房が実際の被害者であり、最も抑圧されている人間＝「土民」の視線を排除して、山下＝BC級戦犯の視線のみでストーリーを描いているからだと思われる。

次に、安部公房の内面を探るにあたって、53年2月に理論社から出版された『壁あつき部屋——巢鴨BC級戦犯の人生記』という著作を同時に考察したい。安部が巢鴨拘置所を訪れたのは53年2月、同年4月に『裏切られた戦争犯罪人』を書き、11月に脚本『壁あつき部屋』を書いた。実は、巢鴨に監禁されているBC級戦犯の手記を集めた『壁あつき部屋——巢鴨

BC 級戦犯の人生記』を映画化するにあたって、理論社から安部に台本執筆の依頼があったからこそ、安部の巣鴨拘置所探訪があったのである。つまり、ルポルタージュの『裏切られた戦争犯罪人』とシナリオ『壁あつき部屋』は、この手記『壁あつき部屋——巣鴨 BC 級戦犯の人生記』を底本にしていることが言えるだろう。脚本の創作経緯について、安部は次のように語っている。

その経緯は巣鴨のことを書いた「壁あつき部屋」、あれは五社から映画化の申込みがあった。その前に出版元の理論社でこれの映画化に協力してくれないかという話があったのです。[……]だから僕が作ったようなものです。全部ときほぐしてそれを組立てたものです。[……]何しろ手記でしょう。厳然たる事実が——人為的に簡単に動かせないくらい強い能動的事実があるわけです。これに負けちゃいけない。それをときほぐして組立てる<sup>24</sup>。

引用部に書かれているように、シナリオ『壁あつき部屋』は、安部が手記『壁あつき部屋』全体を確認した上で、それぞれの記述者の手記を解体して、各手記を組み合わせて作った新しい作品である。では、シナリオ『壁あつき部屋』で描かれている山下のストーリーは、この底本となっている手記において、どのように記されているのだろうか。木村陽子の考察によれば、シナリオ『壁あつき部屋』の山下のストーリーは、手記『壁あつき部屋』に記録されている「沢田」という戦犯の話を下敷きにして<sup>25</sup>。

百メートルも歩いたかとおもうと、山小屋が見えた。そして意外な事には、そこでは火が燃えていた。[……]さらに意外な事には、そこには若い土民の男が一人で夕飯を炊いているのであった。[……]ところがその饗宴の途中、K 軍曹はふつうの会話の調子で、この男、つまりわれわれの招待主を、やっつけて出発しようといいだした。[……]

K 軍曹の言葉に、私以外の三人は煮え切れない同意を表示したようだったが、私は真っ向から反対した。[……]もしそんなことをすれば必ず罰があたるといった。この最後の言葉は、彼らの感情に訴えなかったからいったのだ。K 軍曹はもうそれ以上いい張るのをやめて、黙々と飯を食っていた<sup>26</sup>。

シナリオ『壁あつき部屋』の山下のストーリーは、手記『壁あつき部屋』の「沢田」の話をもとにしていることは明らかである。ただし、手記では上官の K 軍曹は最終的に土民殺害の命令を撤回したのである。これに対してシナリオでは、上官の浜田は殺害の命令をあくまで譲らず、山下も結局その命令に従い、土民を殺してしまったのだ。こうした相違について、木村陽子は次のように述べている。

まず、手記集から初稿形への設定上の改変として注目されるのは、[……]顕著な加害行為の加重化である。[……]手記集刊行の裏に階級闘争の高揚をねらう共産党の意思が働いていたことは前述したが、党の描く見取り図では、BC 級は軍上層部の奴隷として使役された拳句に違法行為を強いられた、究極の受動的な存在でなければならなかった。しかし、実際には執筆者の多くは軍隊内の中堅幹部に位置し、一方で彼らは部下に違法行為を強いした上官でもあった。恐らく安部はこうした矛盾を解消するために、主要登場人物の階級を最下層に設定し、さらには不可抗力の罪悪を強要された BC 級の問題が階級問題そのものであることを強調するために、加害行為の加重化を行ったものと判断される<sup>27</sup>。

木村によれば、両作の最も異なるところは、シナリオでは「加害行為」が「加重化」されている点にある。そして、安部がこうした措置をしたのは、党员作家である以上、共産党の政策に従った点である。筆者もこの木村の論には同意を示す。ただ、このシナリオは、安部が各手記を解体して新しく創作した作品であるた



め、山下の出来事は、一人の手記だけを下敷きにして構成されているのではない。例えば、手記『壁あつき部屋』には、「沢田」の話以外にも、山下のストーリーと共通した記述が見られる。

この日のうちに首実検があり、起訴されてしまった。[……]首実検にきたフィリピンの証言など、私の見たこともないような人間であった。そばにいた検事が「あいつをさせ、あいつを」といったから、証人は私をさしたのであった。だが事件はたしかにあったのだ。それは昭和二十年十月二十六日ごろ、食糧収集にいったとき、武装農民に出あい、私の分隊長ほか二名の上級者の兵隊達が、それを殺したことなのである。裁判は、いたって簡単に、比島証人の首実検と証言を絶対的な証拠として行われた。私も証言台に立たされたが、それはただ形式でしかなかった。ついに私は、自分の主張も取り上げられずに、上級者がやった事件の罪を、なんにもしない私がおわされてしまった。判決は「突くを削除する。銃で三回殴り住民を死に至らせしめた罪により、終身刑を宣告する」というのであった。私は、裁判がこうも簡単にできるものなら、憎いと思うやつは、嘘の証言さえすれば誰でも死刑にすることができると思った。実際この事件をやった上級者の兵隊の二名は、起訴さえされていないのである<sup>28</sup>。(手記一)

続いて、手記『壁あつき部屋』に収録されている「飯塚」という戦犯の話と比較したい。

検事は最初大隊長に、スパイ処刑の命令を出したか、またその事実を知っていたかどうかをたずねると、「命令を出したことはないし、その事実も終戦後はじめて知ったのである」と答えた。[……]この言葉を聞いて、彼等二人の計画——すべてを私と山崎の二人におしつけて、自分等は生きて帰ろうとしている——が理解できた。[……]検事は大隊長の返答をきき終わるや否や、じろっと私を見て、お前の返答はどうかといった。私は心を落ち着けようとするが、彼等のやり方に対する憤りのために、身体がふるえてきて、思うようにしゃべれなかった。しかし、できるだけ静かに、「命令は大隊長から何年何月何日の何時頃、どこにおいて、口頭で下された」と、今迄と同じ返答をくり返した<sup>29</sup>。(手記二)

手記の引用とシナリオの引用を比較すれば分かるが、横田と飯塚の過去の出来事は、脚本では、山下の出来事に統合されている。シナリオと手記との相違は、表に示される通りである。

安部は、手記『壁あつき部屋』を「全部ときほぐしてそれを組立て」て、シナリオ『壁あつき部屋』を作ったと述べているが、上記に羅列した両者の差異を見れば、安部が、多様な手記を組み合わせて脚本を作る際、手記の内容を自分の方向性に合わせて手記とは異なる人物像をシナリオで作り上げていると思われる。

その差異を具体的に論じると、シナリオ『壁あつき部屋』では、証人として裁判に出席したのは日本人上官の浜田であり、無罪の浜田とは対照に一般兵士と設定されている山下は、浜田の歪曲した証言に対して憤

	証人：	日本人上官：	兵士：
シナリオ 『壁あつき部屋』	日本人上官	不起訴	無言で犯罪を認める
手記（一） 『壁あつき部屋』	フィリピン人	不起訴	無言で犯罪を認める
手記（二） 『壁あつき部屋』	日本人上官	起訴	無罪を主張

りを覚えてはいるが、裁判の結果に対して反抗なしに受け止めている。手記一では命令を下した上官は起訴されることなく、命令によって罪を犯した兵士が裁判では自己の無実を主張していない点において、シナリオ『壁あつき部屋』と共通している。ただし、裁判で兵士を断罪する証人として出席したのは、原住民の「フィリピン人」であることは注目に値する。手記二では、日本人上官が下級兵士の証人として不利の証言を語っているところはシナリオ『壁あつき部屋』と同じである。しかし、審判を受けているのは下級兵士だけではなく、日本人上官も同じ様に審判を受けている。また、シナリオ『壁あつき部屋』と最も異なるのは、下級兵士が自分に罪を被せようとする上官の証言を否定して、自分の無罪を一貫して訴えている点である。

シナリオ『壁あつき部屋』は、まず権力構造の最も下層部に位置する原住民「フィリピン人」の声を奪い、次に、上官に対して被抑圧者である下級兵士について、無言で犯罪を認める兵士のエピソードを選択し、抑圧者に反抗している兵士のエピソードを排除している。最後に、シナリオは起訴されている日本人上官ではなく無罪の日本人上官を浜田の原型にしている。つまり、本来、原住民と兵士と上官で構築されている構造が、原住民と反抗性を持つ兵士が排除され、起訴されている日本人上官よりも、無罪の日本人上官をモデルにさせることによって、シナリオでは、上官＝抑圧者と兵士＝被抑圧者から成る二項対立的な構造に変容したのだ。

安部は、手記『壁あつき部屋』からシナリオ『壁あつき部屋』への改稿過程において、実際の被害者であり、最も抑圧されている原住民を排除した上、無罪の日本人上官という抑圧者を優先し、兵士における対抗的な側面を意図的に隠蔽する一方で、兵士の被抑圧者としての側面を誇張に表象することによって、被害者である兵士の像を作り上げたと言えるだろう。従って、安部公房が、ルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』とシナリオ『壁あつき部屋』において、「ギセイ者」として描いている BC 級戦犯には、実は、安部

が作り上げた被害者のイメージを帯びているのではないだろうか。次節では、安部公房に内在している、「加害者意識」と「被害者意識」との力関係を通して、安部がルポルタージュにおいて、BC 級戦犯における加害者の側面を意図的に否定し、被害者の側面を強調する原因を分析する。

### 3. 抑圧された「加害者意識」

安部は、ルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』とシナリオ『壁あつき部屋』において、BC 級戦犯における加害者の側面を意図的に抑制しながら、被害者の側面を過剰に表現していることを前節に述べた。安部が、本来加害者であるはずの BC 級戦犯を被害者に設定させている行為は、彼の内面における「加害者意識」と「被害者意識」との力関係と密接に関わっていると筆者は考える。まず、安部がルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』において、下級兵士が上官の命令によって罪を犯したことへの記録は、他のルポルタージュでは異なる内容で記録されている点に注目したい。

(事例一) 学習を通じて新しい社会認識を得た戦犯たちも、自身の罪行を書き出すことを求められて躊躇した。なかには開き直ってすぐに書き上げた戦犯もいたが、大半は半年や一年以上という長い時間をかけて書いた。当初は、何をどこまで書くべきか、これは命令でやったことだから書いても許されるかもしれないが、これを書けば死刑はまぬがれないといった打算と駆け引きのなかで迷いながら書いて提出した。残虐行為といえども命令されて行なったことで、自身には責任はないという弁明書のような内容が多かった<sup>30</sup>。

(事例二) ミンダナオ島ダバオに於て私が小隊長として中隊長の命を受け、私の陣地付近に在住する比島人約六十名を反軍者として部下を率ゐ処断したもので、[...]その後で中隊長森田大尉の裁

判があり、その時私は証人として中隊長の裁判に出ましたが、自分は既に死刑になつたので中隊長丈でも助けてあげたいと思つて上官たる中隊長の命令であつたけれども、自分の判断で此の事件は決行したと一切の罪を自分で負いましたので、中隊長は死刑を免かれ有期懲役となりました。私は死の判決を受けても大勢の部下と上官の命を救う事が出来たと思つています<sup>31</sup>。

事例一のように、自分の加害行為の責任を上官に転嫁して、正当化しようとする戦犯は多くいた。更に、事例二のように、上官の命令に従っただけではなく、偽りの証言をして上官を助けようとする戦犯もいた。とりわけ、戦犯研究において重要な資料である事例二の『世紀の遺書』は、安部のシナリオ『壁あつき部屋』の前に刊行されたにもかかわらず、シナリオでは、こうした記述が全く見られないのは、安部が、BC級戦犯を加害者として描いている資料を意図的に排除していることを傍証していると言えるだろう。

仮に安部が上記の資料を知らないとしても、巣鴨拘留所を訪問した際、「すがも新聞」という新聞紙を参考にしなかったはずがない。「すがも新聞」とは米軍管理のもとで1948年6月から1952年3月までに刊行された獄中新聞である。もちろん当時の新聞は検閲を受けていたため、BC級戦犯の意識を全て正確に反映しているとは言えないが、BC級戦犯を研究する資料としての高い価値を有していることにはかわりはない。安部が「すがも新聞」を参照した証拠は、彼が一貫して主張しているBC級戦犯こそが戦争犠牲者であるという考えが、「すがも新聞」に書かれているところから伺える。

個人の意志は全体の意志に反せざる限りに於て自由であり、全体の意志に反することは絶対に許されない。かかる原理の最も良く表われたものが過去に於ける日本軍隊であった。即ち軍隊に於ては全体の意志は常に上官により決定され、その上官の命令に対しては——時には理不尽であつてさ

え、——絶対服従を強制された。法律的にも命令に違反することは逆命罪を構成し、上官に反抗することなどは夢想だに為し得なかったのである。かかる全体主義の行われるところでは個人の責任ということとはあり得ない。意志の自由があつて初めて個人の責任ということがいえるからである<sup>32</sup>。

下線部に示されるように、「すがも新聞」では、BC級戦犯には個人的責任がないと明確に描かれている。これは、安部が『裏切られた戦争犯罪人』で書いたBC級戦犯は戦争の犠牲者であるという考えと共通している。「すがも新聞」について、片岡英子は次ように論じている。

これは、彼ら（BC級戦犯）が専ら被害者としての認識に始終しており、加害者としての自覚がほとんどなかったからであるといえよう。そこには、アジア諸国の人々に対する視線はみられないが、こうした加害意識の欠如は、この記事に特別なことではなく、『すがも』やその他の手記にも共通してみられる。彼らは自身を、「報復裁判」の犠牲者であったり、国家が引き起こした戦争の犠牲者であると認識しているのである。こうした犠牲者としての自覚は、強烈に彼らに内在しており、結果的にアジア諸国への加害意識の欠如へと繋がっている<sup>33</sup>。

片岡は、「すがも新聞」において、BC級戦犯が自らを「犠牲者」と主張する背後には、BC級戦犯が自分を「被害者」と始終認識しており、「加害者」であるという認識を完全に隠滅していると述べている。氏の論によれば、BC級戦犯は被害者意識によって己の加害者意識を抑圧し、その結果、アジア諸国という事実上の被害者に対する加害意識の欠如へと繋がっていったのである。ルポルタージュとシナリオにおいてBC級戦犯を「ギセイ者」と記録する安部の考えが、「すがも新聞」に表現されている犠牲者思想と共通していることは、安部の内面にもこうした被害者意識が加害

者意識を抑圧している力関係があると言っても過言ではないだろう。ここで、シナリオ『壁あつき部屋』の底本となっている手記『壁あつき部屋』に改めて注目したい。

夢にも予期しなかった圀圀の身は、私にとっては又と得難い体験である、過去に対する真剣な反省の機会を与えてくれました。肉体的には自由を拘束されていますが、精神的な自由があります。戦後七年屈辱と煩悶苦悩の獄中の明け暮れに身を以て体得したものは、平和と自由が如何に尊いものであるかということ、そして私自身も亦明瞭に戦争責任者の一人であったということです。[…]  
如何に美辞麗句をならべても、大東亜戦争なるものは明らかに侵略戦争でした。[…]憲兵として三年十ヵ月、直接国民に接し、強制力を加えて戦争への協力を強いた罪は、かつての戦争指導者 A 級戦犯に次ぐものと思います<sup>34</sup>。

下線部に示されているように、この手記を書いた戦犯は、BC 級戦犯は決して犠牲者ではなく、その罪は A 級戦犯と同じものであると記している。ここで、注目に値するのは、「過去に対する真剣な反省の機会を与えてくれました。肉体的には自由を拘束されていますが、精神的な自由があります。」に書かれているように、ここでの記述者が、自ら自分の罪の意識に目覚めている点である。上記の記述とは対照に、安部公房のシナリオ『壁あつき部屋』を以下に引用する。

#### 南方収容所

柵の内側に整列している日本人俘虜。外で喚んでいる土民の老婆。老婆は息子を殺した男を探したいと MP に申し出している。MP、柵を開けて老婆を入れてやる。老婆は俘虜達に近づくといきなり懷に隠していた棍棒を取り出して、手当たり次第俘虜達を殴り始める。

殴られた山下。

山下はなぜかすすり泣き始める。

バラックの一室

母の胸の上で現実にくすくす泣いている山下。[…]  
口を開け体をすくめて身構える浜田。

山下（あげた手をおろし）「ゲスッ！殺してやろうと思ったが、殺すのが惜しくなったんだ……  
死ぬよりも腐る方が貴様には似合いだよ」<sup>35</sup>

手記『壁あつき部屋』における自ら罪意識に目覚める戦犯とは異なり、シナリオでは、山下は自ら罪の意識を悟ったのではなく、外部の力によってその罪を意識し始めたのである。山下は母の遺体を見ているうちに土民の老婆のことを思い出し、亡くなった母と土民の老婆の姿がここで重ね合わされ、老婆の息子が自分の犯行によって死亡したことに気づいたのである。そして、初めて自分が加害者であることに目覚めた山下は、歪曲した証言を下した上官浜田への復讐を諦める。つまり、今まで被害者意識に左右されている山下は、「土民の老婆」や「母の死」など外部の力が機能することによって、その抑圧されていた加害者意識が初めて解消されたのである。従って、自分が実は加害者であることに気づくまで、山下の内面において加害者意識が被害者意識に無意識に抑圧されていたということが言えるだろう。山下の内面に見られる加害者意識と被害者意識の葛藤は、恐らく、安部公房の内面において、同じレベルの葛藤が繰り返されているところ由来しているのだろう。

戦時中、記録文学はルポルタージュと融合し、作者の主観的感情や物語性といったフィクション的な一面を織り込むことによって新たな展開を迎えた。こうした新しいルポルタージュには、従来の記録文学における反権力性が継続して存在している。伝統的ルポルタージュにおける事実の忠実な記録とは異なり、新しいルポルタージュにおいては先ずその反権力性、即ち、暴力性が何よりも重視されているのである。斎藤茂男が「記者は「××新聞の記者」であるまえに、「闘争者」「革命者」であるべし」<sup>36</sup>と語っているように、新しいルポルタージュに必要とされていたのは「闘争」や「革命」と言った暴力的要素である。日本共産党は第 5 回



全国協議会（51年）で提案された「新綱領」によって軍事方針を採り、武装闘争を行った。方針は後ほど失敗し、第6回全国協議会（55年）では、こうした暴力的政策を放棄したのである。安部の『裏切られた戦争犯罪人』と『壁あつき部屋』は、日本共産党による武装闘争の最中に刊行されているため、党の政策に合致する暴力性を孕んでいると言っても過言ではない。日本プロレタリア文学集では、党員作家が書いたルポルタージュの性質を以下のように総括している。

明治期、日本資本主義の創成期に、ヨーロッパ近代と異り、封建制強く民主化の遅れた日本の状況を考える時、社会的事実を事実としてとらえ描く、日本のルポルタージュ、記録文学の世界が、このように、厳しい弾圧支配に屈せず、侵略戦争に反対し、労働者農民解放の旗をかかげた階級闘争、階級的文学運動とともに育った必然性が理解できる<sup>37</sup>。

引用部に示されるように、左翼のルポルタージュは弾圧に反抗する階級闘争の文学運動の一環であり、その暴力性は広く認められている。党員作家としての安部のルポルタージュに関しても、上記の評価は適切だと言えるだろう。既に述べたことではあるが、安部は『裏切られた戦争犯罪人』と『壁あつき部屋』において、BC級戦犯を「ギセイ者」だと主張し、BC級戦犯の加害者の側面を抑制して、被害者の側面を過剰に描こうとしている。安部のルポルタージュに見られるこうした特徴は、記録文学からルポルタージュに統一されるプロセスを考慮すれば、ある種の必然的産物であったと言えるだろう。つまり、被害者のイメージを過剰に作り、BC級戦犯における加害者の側面を抑制して描くルポルタージュは、党員作家としての安部に要求されているものである。なぜなら、登場人物から加害者意識が過剰に表出されれば、読者に暴力性を喚起する機能は弱くなってしまい、その反権力性を中核とする新しいルポルタージュの意義にも揺らぎが生じてしまうからである。つまり、党員作家である以

上、安部は抑圧階級と闘争する資格を獲得し続けるために、BC級戦犯における加害者意識を抑制する一方、被害者意識を常に前景化しなければならないのである。従って、テキストにおける登場人物の内面において、加害者意識が無意識の領域で、被害者意識に抑圧されていることは、党員作家・安部公房の内面に定住している被害者意識が、加害者意識を無意識に抑圧している心的構造に由来していると言えるだろう。

ただし、一言付け加えとするならば、この安部の内面で構築されている、被害者意識と加害者意識との抑圧関係は、否定的に評価されるべきだと考えているということである。なぜなら、加害者意識が被害者意識に抑圧されるということは、日本の敗戦後の責任問題などの課題とも関わってくるためである。例えば、戦後の責任問題について、高橋哲哉は次のように語っている。

侵略者である自国の死者への責任とは、死者としての死者への必然的な哀悼や弔いでも、ましてや国際社会の中で彼らを「かばう」ことでもなく、なによりも、侵略者としての彼らの法的・政治的・道義的責任をふまえて、彼らとともにまた彼らに代わって、被侵略者への償いを、つまり謝罪や補償を実行することでなければなるまい<sup>38</sup>。

高橋の観点によれば、敗戦後の責任を真に果たそうとするならば、「自国の死者」を「かばう」のではなく、「侵略者としての彼ら」に代わって、「被侵略者」に対して謝罪と補償を実行することが何よりも重要である。「自国の死者」という高橋の言葉は、そのままBC級戦犯に置き換えられても良いだろう。つまり、想像上の被抑圧者と実際の被抑圧者との入れ替えによって、加害者であるBC級戦犯を被害者に仕立てる党員作家の安部公房の創作は、侵略者を「かばう」行為であるため、そのルポルタージュが孕む抑圧的構造には、常に侵略戦争の否認に繋がってしまう恐れがあることを看過してはならない。最後に、安部公房の『壁あつき部屋』に関する鳥羽耕史の論述を引用する。

大幅な改変を経た『壁あつき部屋』には、それでも他の「戦犯映画」にはない大きな特徴があった。それはアジアへの視線である。[……]こうしたアジアからの告発により、日本人の加害者性が浮き彫りになる部分は、全面的な削除を免れて生き残ったが、必ずしも正当に受容されなかったようである。[……]安部の意図した告発は、民族的差別を前提とした嘲笑によって迎えられ、正反対の効果を生んだわけだ<sup>39</sup>。

鳥羽によれば、『壁あつき部屋』と他の「戦犯映画」とを区別するものは、事実上の被抑圧者への「視線」にある。こうした「視線」は、戦犯の加害者性を強調するはずだったが、「正当に受容され」ず「正反対の効果を生ん」でしまったのである。筆者は、その「正当に受容されなかった」原因の一つが、脚本を書いた安部の内面では加害者意識が被害者意識に抑圧されていることによって、テキストでは実際の被害者はなく、ただ想像上の被害者のイメージだけを作り上げていることにあると考えている。ここで「ギセイ者」として描かれている BC 級戦犯とは、実は安部が作り上げた被害者であるがために、実際の被害者であるアジアの原住民にとっては、どうしても受け入れ難いことではないだろうか。

## おわりに

本論文では先ず、今まで区別なしに使われてきた記録文学とルポルタージュとの差異を分析した。日本近代文学において、記録文学がルポルタージュに統一される過程では、名称の変化ではなく、概念の変容が重要視される。事実を忠実に取材するジャーナリズムから、作者の加工によって文学的要素の比重が大きく占めるようになってきた新しいルポルタージュは、従来の記録文学における反権力性を継承したため、その暴力性によって評価されるようになった。とりわけ、左翼作家によるルポルタージュは、事実の記録よりも、権力に対抗する性質を重視し、そのルポルタージュは、

自らを被抑圧者の立場に立たせることによって、抑圧階級と対抗する資格を維持できたのである。

次に、そんな流れの中、1953 年 2 月、BC 級戦犯の手記を収録した『壁あつき部屋』が理論社から刊行された。この著作を映画化する際、脚本を担当することになった安部公房は、同月に戦犯を拘置している巣鴨拘置所を訪問し、戦犯のインタビューをもとに、ルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』を同年 4 月に刊行した。このルポルタージュを発展させたのがシナリオ『壁あつき部屋』である。本論文では、安部が数多くある手記の中から、自身が加害者であることを告白した戦犯の手記を全面的に排除した上で、被害者意識が通底している手記のみを参考してシナリオ『壁あつき部屋』を創作したことを分析し、手記からシナリオへの改稿過程において、安部が、兵士における加害者の側面を隠蔽する一方で、兵士の被害者の側面を過剰に表現している点について考察した。こうした考察を通して、登場人物の内面において、加害者意識が被害者意識に無意識に抑圧されていることを明らかにした。

安部がこのルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』とシナリオ『壁あつき部屋』において、BC 戦犯における抑圧者としての側面を抑制して、彼らの被抑圧者としての側面を強調し、加害者であるはずの BC 級戦犯を意図的に「ギセイ者」として描いていることは、1950 年代の日本共産党の暴力的政策が、黨員作家としての彼に与えられた要求と関係している。1930 年代の記録文学における反権力性を継続した 1950 年代のルポルタージュ、とりわけ左翼のルポルタージュは、抑圧階級の政治的・社会的抑圧に反抗する手段として使われていたため、その暴力性は広く認められている。同様に、黨員作家である安部のルポルタージュにおいても、その反権力性が求められていた。日本共産党が武装闘争の政策を掲げている中で出版された『裏切られた戦争犯罪人』と『壁あつき部屋』は、党の政策に合致する暴力性を孕んでいることは言うまでもない。

その後、サンフランシスコ平和条約発効後において

も、日本が依然とアメリカに抑圧されている状態への改善を求める日本共産党の政策に呼応する党員作家としての安部公房は、加害者意識が抑圧されながらも、同時に被害者意識は前景化されている BC 級戦犯を自身の作品の登場人物として設定することによって、日本における敗戦後の処理に関する不公平さを国民と共感したのである。従って、安部のルポルタージュとシナリオの登場人物の内面において、加害者意識というものが無意識の領域では、被害者意識に抑圧されてい

る原因として、作者・安部公房の内面に見られる、被害者意識が加害者意識を無意識の領域に抑圧している構造にあることは明らかではないだろうか。

〔付記〕 本稿は2018年7月8日に金沢大学で行われた「日本文学協会第38回研究発表大会」で発表した報告「安部公房初期作品研究——記録文学における被抑圧者の表象」に筆を加えたものである。

#### 注

- 1 『世界文学大事典 5 事項』集英社、1997年10月、p. 863
- 2 松浦総三「第五章 日本ルポルタージュ史論」『松浦総三の仕事 第3巻 ジャーナリストとマスコミ』大月書店、1985年1月、p. 76
- 3 『日本現代文学大事典』では、記録文学の概念について、「ノンフィクション、ルポルタージュ、ドキュメンタリーなどと軌を一にする虚構性の薄い読物。事実性をありのままに浮き彫りにさせてゆく記録性の勝った読物。」(明治書院、1994年6月、pp. 395-396)と記されている。『新潮日本文学辞典』では、「広い意味では、ルポルタージュをはじめ、自叙伝、伝記、日記、紀行、生活記録、手紙などにいたる事実を記録的に表現した文学的作品のことを記録文学とよぶ。狭い意味の記録文学は、いわゆるルポルタージュである。」(新潮社、1988年1月、p. 371)と両者を全く同一概念として扱っている。しかし、『日本現代文学大事典』や『新潮日本文学辞典』には記録文学の説明文が収録されているものの、『世界文学大事典』には、記録文学が事項として収録されていないことは、記録文学が世界的に通用する文芸用語ではないことを傍証している。
- 4 前掲書2、p. 77
- 5 立花雄一『明治下層記録文学』創樹社、1981年4月、p. 9
- 6 明治時代の「下層記録文学」を文学と見ない観点もある。武田徹は明治時代の「下層記録文学」について、「松原と横山は下層社会の生活を細かく調査し書いた。[...]生活様式を事細かに綴ってゆく筆致は文学作品よりも文化人類学の学術的報告を彷彿させる。[...]これらは文学というよりも社会科学的な作品なのだ。そこで事実を網羅的に示されるが、ひとつの「物語」として起承転結などの直線的な構造・構成を持って語られるわけではない。」(『日本ノンフィクション史 ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』中央公論新社、2017年3月、p. 14)と述べている。
- 7 政策に反対せず、日本の侵略戦争を支持するルポルタージュは出版を許可された。例えば、1938年に結成・派遣された従軍ペン部隊の作家によって書かれた従軍記というルポルタージュは新聞・雑誌に掲載された。林美美子の『戦線』(朝日新聞社、1938年)などがその一例である。
- 8 ジイド『ソヴェト旅行記』小松清訳、岩波書店、2008年2月、p. 18
- 9 「ルポルタージュ文学」と「文学的ルポルタージュ」と言った言葉に関して、否定的に評価されることがある。例えば、大宅壮一は上記の言葉について、あくまで小説であり、事実をありのままに記録し、フィクションを排斥する「ルポルタージュ」の性質に反しているとネガティブに評している。本稿ではこうした偏見性を持たずに論じる。
- 10 中野重治「ルポルタージュについて」『中野重治全集第十一巻』筑摩書房、1979年2月、p. 175
- 11 石川達三の『武漢作戦』に関する論述は、武田徹の『日本ノンフィクション史 ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』(中央公論新社、2017年3月)を主に参照した。

- 12 本稿では、外務省日本外交文書で使われている言葉「サンフランシスコ平和条約」を使用する。
- 13 鳥羽耕史『1950年代——「記録」の時代』河出書房新社、2010年12月、p. 9
- 14 前掲書、p. 10
- 15 安部公房が如何にルポルタージュに対して関心を持ち始めたかについて、鳥羽耕史の『運動体・安部公房』（一葉社、2007年5月）、呉美姪の『安部公房の〈戦後〉——植民地経験と初期テキストをめぐって』（クレイン社、2009年11月）に詳しい考察がある。本稿は両氏の考察から有益な示唆を得た。
- 16 安部公房「新しいリアリズムのために——ルポルタージュの意義」『安部公房全集3』新潮社、1997年10月、p. 250
- 17 安部公房「ルポルタージュの意義」『ルポルタージュとは何か？日本の証言（増補）』柏林書房、1955年9月、p. 8（『ルポルタージュ日本の証言 復刻版 補冊 ルポルタージュとは何か？』三人社、2014年12月）
- 18 鳥羽耕史「解説・解題」『ルポルタージュ日本の証言 復刻版 別冊 解説・解題』三人社、2014年12月、p. 32
- 19 安部公房「裏切られた戦争犯罪人」『安部公房全集3』新潮社、1997年10月、p. 447
- 20 日本国は、極東国際軍事裁判所並びに日本国内及び国外の他の連合国戦争犯罪法廷の裁判を受諾し、且つ、日本国で拘禁されている日本国民にこれらの法廷が課した刑を執行するものとする。これらの拘禁されている者を赦免し、減刑し、及び仮出獄させる権限は、各事件について刑を課した一又は二以上の政府の決定及び日本国の勧告に基く場合の外に、行使することができない。（「第四章 政治及び経済条項 第十一条」『日本外交文章——サンフランシスコ平和条約調印・発効』外務省、2009年、p. 151）
- 21 鳥羽耕史『運動体・安部公房』河出書房新社、2010年12月、p. 178
- 22 前掲書 19、p. 446
- 23 安部公房「壁あつき部屋」『キネマ旬報』1953年11月、p. 107（シナリオ「壁つき部屋」のテキストには複数のバージョンがある。鳥羽耕史の『1950年代——「記録」の時代』によれば、現在確認できる最も古いテキストが1953年11月の『キネマ旬報』に掲載されたものである。全集に収めているテキストは、初出版からかなり改稿されたため、本稿では、全集ではなく、『キネマ旬報』に掲載されている文章から引用する。）
- 24 安部公房「新しい日本文学・新しい日本映画」『安部公房全集3』新潮社、1997年10月、pp. 523-526
- 25 木村陽子「安部公房「壁あつき部屋」試論——罪責の行方」『昭和文学研究』56巻、2008年3月、p. 156
- 26 「まず石をなげうて・沢田陽三」『壁あつき部屋——巣鴨BC級戦犯の人生記』日本図書センター、1992年5月、pp. 196-197
- 27 前掲書 25、p. 156
- 28 「無実の終身刑・横田敏夫」（前掲書 26）p. 102
- 29 「どろ試合・飯塚節夫」（前掲書 26）pp. 58-59
- 30 岡部牧夫、荻野富士夫、吉田裕編『中国侵略の証言者たち——「認罪」の記録を読む』岩波書店、2010年4月、pp. 34-35
- 31 「哄笑（比島）」（向井加賀次郎、元海軍少尉）『世紀の遺書』講談社、1984年8月、p. 591
- 32 「「個」の自覚 平和日本建設の基礎」『すがも新聞』第47号、1949年4月23日（『復刻版すがも新聞 第1巻』不二出版、1985年8月、p. 185）
- 33 片岡英子「BC級戦犯と戦争責任——『すがも新聞』にみる戦犯の意識を中心に」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第34巻、2012年、p. 114
- 34 「B・C級戦犯とは・河上浩」（前掲書 26）pp. 219-221
- 35 前掲書 23、p. 119
- 36 斎藤茂男『ルポルタージュ 日本の情景 11 事実が「私」を鍛える』岩波書店、1994年5月、p. 39
- 37 今崎暁巳「解説」『日本プロレタリア文学集・34 ルポルタージュ集（二）』新日本出版社、1989年5月、pp. 514-515
- 38 高橋哲哉「汚辱の記憶をめぐって」『戦後責任論』講談社、1999年12月、p. 198
- 39 前掲書 13、p. 103